
叶わない恋

アンゴル・モア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叶わない恋

【Nコード】

N0466BA

【作者名】

アングル・モア

【あらすじ】

灰原哀はコナンの事が好きだけど、はじめて好きになった人には幼なじみの彼女がいた。

『どうして工藤君を好きになったの…？』

『好きにならなければ、よかった。』

あなたを好きにならなかったら、こんなに辛い想いをしなくて済んだのに…』

『蘭…俺はお前の事が……』
『コナン…君？』

すれ違う想い————その先に一体、何が待っているのか？！

貴方が好きで（前書き）

哀ちゃんの恋心

貴方が好きで

こんなに近くににいるのに…

どうして貴方は遠いの？

私達は、”友達以上“にはなれない？

……………それでもいい。

私は、貴方のことが好き。

『工藤君』…

私の名前は『灰原哀』：

本当の名前は“宮野志保”。

私には本当の名前より、

“灰原哀”の方が似合う気がする…。

だって私は名前の通り『哀しい存在』だから……………。

ーキーンーコンーカンーコーン……………。

学校のチャイムが教室に鳴り響く。

しばらくすると教室は
騒がしくなる。

コナン『……………原！……………灰！……………原！……………』

灰原……

コナンの隣の席に居る哀はぼうっとして黒板を見ていた。

コナンの声は哀の耳には全く入っていないかった。

コナン 『灰原ー!?!』

コナンの声が、教室中に響く。

さっきまで、騒がしかったクラスメートの声が一気に静まり返って、
コナンに視線を向けたが
また何事もなかったかのように喋り始めた――

『何よ!?! いきなり大きな声を出して!びっくりしたじゃない!』

『ワリィ、ワリィ…何回呼んでも返事しねえから、ついつい…』

『ついついってねえ？』

コナン『それより、何でぼうつとしてたんだ？』

コナンは、『きになる』
という顔で哀を見た。

返ってきた返事は
素っ気なかった。

灰原『別に…ただ考え事をしてただけよ』

『何だよそれ！可愛くねえなあー！』

哀はブスツとした。

（どうせ私は可愛くないわ
よ！！！）

灰原『悪かったわね！！可愛くなくて！どうせ私は誰かさんの彼女

みたいに可愛くないわよ!』

コナン（こ、怖え! つうか、灰原の奴…）

『ら、蘭は彼女じゃねえーよ／＼ただの幼なじみだっ!』

ズキン…。

ズキン…。

言葉では否定しているけどやっぱり蘭さんの事好きなのね…。

照れ隠ししちゃって…。

ズキン…ズキン…。

やっぱり、蘭さんには敵わないわね…。

『あら？

私は蘭さんだとは一言も言っていないわよ？』

『なっ／＼／』

『天下の名探偵さんも彼女の事になると冷静さを失うのね?』

コナン『だから!彼女じゃないって言ってんだろ／＼

だいたい、蘭はなあ…。本当にただの幼なじみで……。だから、別にそうゆう意味で好きって訳じゃなくてだなあ…。』

ズキン…。

本当は、

彼女の事、
好きな癖に…

照れ隠ししちゃって。
素直じゃないんだから…。

もしも
蘭さんが本当にあなたの彼女じゃないなら、私とずっと一緒に居てほしい。

でも、消して叶わない願い……。

だって、彼が好きなのは、私じゃなくて、『蘭さん』なんだもの…。
私が適う相手じゃないから…！

コナン『それでなあ？蘭の奴…って聞いてんのか？灰原！？』

ズキン…。

『灰……………原…？』

こんなに胸が苦しくなるなんて…
苦しくて胸が張り裂けそう……

“ どうして 私は彼を好きになったの？ ”

……………。

好きにならなければ、良かった……。そうすれば、苦しまなくて済むのに。

あの人には“彼女”（蘭さん）がいるから…。

天使のような…。

「私」じゃ駄目なの…？

工藤くん…？

私は、

貴方の“一番”にはなれない。

私は“地獄に堕ちた天使”だから…。彼女と私は、“正反対”

彼女は天使で…。

私は…。

…。私は何でしょうね？

少なくとも、私は天使じゃない…。

私は…。

『翼の汚れた天使』

でも、工藤君の前では

“心が洗われる気”がするの。

…工藤君。
あなたの前では――。

貴方という時は、
私の中に“光”が入って来るの…。

黒かった翼が、
少しずつ
白くなっていく様な。

でも、
貴方に『天使』がいる。

“毛利蘭”という“天使”が……。

だから、私は“天使”に
なれない。

私がもし、工藤君の幼なじみで、
蘭さんが幼なじみじゃなかったら、

私達は
付き合っていた？
…いや。

きつと、

たとえば蘭さんと工藤君が幼なじみじゃなくても、二人は付き合っていたでしょうね…。

最初から、私に勝ち目なんて、ないのよ…。

それが『運命』なのだから…。

ズキ…

それが、

蘭さんと私の立場が、逆だったとしても………。

私に勝ち目はない。

最初から…分かったのにね…。
けして“叶わない恋”だって…。

(…本当に馬鹿ね…
私…。)

ズキン…。

ズキン…。

そうだよね？ バカだよね…私…。
(お姉ちゃん…)

貴方が好きで（後書き）

感想

待ってます。

失恋　　ゝ哀しい想いゝ（前書き）

やっと書けました！よかったら読んでください！！

失恋　　く哀しい想い　く

『灰…原…さん？』

『哀…ちゃん…？』

哀ちゃん！！』

光彦と歩美は必死に哀の名前を呼んでいた。

今、歩美達は下校中である。

（はっ…）

哀は歩美達の声に、
やっと気がついたようだ。

(私…考え事をしていたのね。)

『哀ちゃん！
大丈夫？さっきから
ずっとぼうつとしてたけど…』

歩美は哀が＜何かあったんじゃないか＞と心配している。

哀もそれに気づいたようだ。

（吉田さん。

心配してくれたのね…。）

『ええ…大丈夫よ。

ごめんなさいね。心配かけちゃって。』

哀は申し訳なさそうにしている。

私のこと、心配してくれて。
』

『おう！』

『は、灰原さんが
元気で良かったです／＼／』

照れながらに光彦君は
言った。

『光彦！お前、どうしたんだあ？
顔、真っ赤だぞお？』

元太がそう言うと、
光彦はさっきより

顔を真っ赤にして、慌て否定して、驚いていた。

『へ？／／／』

『べっ、別にっ！』

な、な、何でもありませんよ／／／／』

『元太くんの気のせいですっ！！／／／／／』

光彦はく違う>と手を振っている。

『ふーん…』

『なら、良いけどよお…』

元太はあまり気にならなかったらしい。

『あはは…』

（はあ…）

光彦は元太が深く追求して来なかったことに、
ホッとしていた。

（危ない、危ない…っと。）

そう思っているのもつかの間。この後、更なる危機が迫ることに、
光彦は気が付かなかった。

歩美は光彦の耳に顔を近づけて
小さな声で言った。

（ねえねえ！

光彦くん！！）

（何ですか？歩美ちゃん？？）

（光彦くんて…）

（はい…何でしょうか？）

ひそひそ…

歩美はニコツとして。

（光彦くんって、哀ちゃんのこと…好きなんですよ？）と小声で言
った。

光彦は赤くなって、
慌てて
頭をブンブン振って否定している。

『あ、歩美ちゃん！？
何を言うんですか／／／／／

ぼ、僕はべ、別に灰原さんの事……／／／／／

えっと、そのっ……ち、違いますよっ／／／／／
』

『あっ……』

気がついたら、光彦は大きな声で言ってしまったらしい。

当然、

みんなは驚いていた。

コ・哀・歩・元『……………』

(…光彦君。
言っちゃったよ……………。

)

光彦達は、みんな
シーンと静まり返っていた。

沈黙を破ったのは、灰原だった。

『あら、私がどうかしたのかしら？』

『えっ？あ、あのっ／＼』

灰原さんって好きな人がいるのかなって、

歩美ちゃんと話してたんです！！』

ごまかすようなそぶり。
ものすごく慌ている。

光彦は自分の気持ちを、まだ哀には知られたくないのかもしれない。

『ですよ？歩美ちゃん！』

困った瞳で歩美に助けを求めている。

歩美は光彦に話しを合わせた。

（光彦くんが困ってるのって、歩美のせいだもんねっ…）

(歩美が何とかしなくちゃっ!!!)

『うん! そうだよ!!!』

『歩美達、哀ちゃんってどんな人が好きなのかなっ? って話してたのっ!!!!!』

(ほっ…)

歩美の言葉を聞いて、光彦は安心していた。

(よかったです…)

それで、哀ちゃんって『好きな人』
いるの？

歩美は興味津々に聞いた。

『そうね…いないって言ったら、嘘になるわね…』

コ・光・元 『ええええっ！！？』

哀の答えに、歩美以外は驚いていた。

みんな『意外』とか、

『想像してたのと全然違う!!』とか…。

そんなふうに思っていたらしい。

.....。

哀がそんなことを言うとは思わなかったのだろう…。

…失礼にも程がある。

『…何よ?? 失礼ね！

私に好きな人がいたら、おかしいのかしら?』

哀は眼を細めて、
コナン達を睨んでいる。

（歩美の事は睨んでいない）

それもそのばす。

コナン達の反応が反応なのだから、

機嫌を損ねても

仕方がない。

三人は怖いのか、怯えながらに答えた。

『い、いや？べ、別に…
んなことねえよ…！』

な、なっ！お前ら？』

コナンは「後は任せたっ!!」

というような目で光彦達を見ていた。

…無責任にも程がある。

光彦は慌てて
言った。

（元太も同様）

「え、ええ！そ、
そうですよ！灰原さん！」

「そ、そうだぜ！灰原！！」

(……)

(本当かしら……？)

哀はまだ三人を疑っていた。

（特にコナン）

三人をまだ怪しいと思いつつも、いつまで疑っても仕方がないと思
い、哀は、

三人を許すことにした。

『まあ、良いわ…

と・く・べ・つに

許してあげる。』

光彦と元太は、ため息をしていた。

余程、怖かったのだろう。今は、

落ち着いている。

一方、コナンは、複雑な表情をしている。

どうやら納得出来ないらしい。

モヤモヤしているのかもしれない。

光彦・元太『ハア…』

（一事はどうなるかと思いました。）

すっかり、安心したのか
元太は小さい声で、

（はぁ……。怖かったぜ。）

と、ぼそつと言ってしまった。

『…小島君

悪かったわね…恐くて…？』

：どうやら、哀には
聞こえていたらしい。哀は恐ろしい笑みを浮かべている。

子供でも殺気を放っているのが分かるくらい。

ゾクっ…。
怖いのか、元太の
体が奮えていた。

元太は、
何とかごまかそうと必死のようだ。

普段あまり使わない頭をフル回転させている。

何とか、
この場を切り抜ける方法がないかと考えているのだ。

元太は斜め前の家を見て、（はっ！）とした。何か思いついたらし

い。

『ほ、ほら！その家に
怖そうな犬がいるだろ？』

『本当だあ！！』

『その犬が怖くてよお？！だから、
灰原の事、怖いって言ったん
じゃなくて…。』

元太は限界なのか、青ざめている。

それに見兼ねたのか、哀は元太を許すことにした。

『そう…ならいいけど？』（充分反省してるみたいだし…ね）

それに、ちょっと小島君が可哀相だし…。

コナンは心の中で、（怖えな灰原…）と思っていた。
哀が聞いていたら、コナンも危険だったろう。

コナンは、＜自分は口に出さなくてよかった＞と思っていた。

元太は心の中で哀が『地獄耳』だという事を知り、

この事をきっかけに、
灰原の前では『怖い』と言わないことを深く決意した。

無論、元太の決意に気づくものは…、誰ひとりとしていなかったのはまた別の話。

『ねえねえ！それより、哀ちゃんってさあ…』

歩美は哀に向かって話しかけた。

『何かしら？
吉田さん。』

『哀ちゃん！ちょっと耳貸して！』

『ええ…。良いけど…。？』

（何かしら…。？）

『あのさ、哀ちゃんの好きな人って、コナン君でしょ？』

そう歩美が言うと、哀は耳を真っ赤にしていた。

『よ、吉田さん／＼／＼』

私は別に…。

』

想定外の歩美の発言に、驚きを隠せなかった。

歩美はニコニコして言った。

『分かるよ。』

私も、

コナン君の事…、

大好きだ
もん!!
』

『……』

哀は歩美の話しを黙って聞いていた。

『…だから』

分かるんだ。
哀ちゃんの気持ち。』

『でもね。

コナン君には好きな人が
いるんだ…。」

歩美は悲しげな表情で
俯きながら言った。

（吉田さん…。）

『そうね。』

確かに江戸川君には、
好きな人がいるわ…。
』

『私ね。コナン君の好きな人って、
蘭お姉さんじゃないかなって思
うの…。』

『…』

『蘭お姉さんと一緒にいるときのコナン君ってね、

いつも蘭お姉さんの事…見てるんだっ…!』

『だからコナン君

蘭お姉さんの事が好きなんじゃないかなって…。』

『確かに…。

江戸川君は蘭さんのことを見ているわね。

だけど…。

江戸川君が蘭さんを異性として意識しているとは、限らないんじゃないかしら？」

『え？』

『でっ、でも！』

じゃあ、コナン君の好きな人って誰なの？

』

（おっかしいなあ…。

歩美、絶対

コナン君の好きな人は、蘭お姉さんかと思ってたんだけどなあ…。

）

『そうね。』

あえて言うなら、
江戸川君の好きな人は、

天使のような広い心の持ち主、かしら。』

『天使のような心の広い持ち主？』

『そうよ!』

『…なんか、歩美。』

哀ちゃんの話し聞いたら、自信無くしちゃった…。』

「吉田さん…」

やっぱり、言わない方がよかったのかしら…。
自分の言った発言に、哀は後悔していた。

…小学一年生に言うことじゃ、なかったたわね…。

『だって、歩美、天使様みたいに

心、広くないもん…!』

『歩美じゃあ、その人に勝てないよ…』

歩美の悲しそうな瞳…。目がうるうるしていて、今にも泣きそうだ。

『私もそう思うわ。』

歩美は驚いていた。

『哀…ちゃんも？』

「私も彼女には、敵わないもの…。」

それに…」

懐かしいという感じの表情を浮かべ、哀は空を見上げて言った。

『それに？』

歩美の頭に？のマークが浮かんでいた。

『…それに、』

江戸川君の彼女、私のお姉ちゃんに似ているから…』

そう言っている哀は、

とても哀しそうに笑っていた。

（吉田さんにお姉ちゃんのこと…、話せるわけないわよね……。）。

（お姉ちゃんはある組織の一員。そして、私を組織から抜けさせるために、…。

そして、私を組織から抜けさせるために、＜10億円強奪事件＞を実行した。

成功したにも関わらず、組織の奴らはお姉ちゃんの事を殺したって…。）

言えるわけじゃない………。)

歩美は哀から何かを感じ取ったのか、何も聞かないことにした。

『そう、なんだ……。』

(哀ちゃんのお姉さん、
何かあったのかな……？)

気になるけど、歩美が聞いて良いことじゃないよね…。

まさか…。哀ちゃんのお姉さん、死んじゃったのかなあ…。

…：…ううん、違う！歩美の考えすぎだよっ！絶対、違うよ！
）

そう思いながら、歩美は頭をブンブンと振っている。

『吉田さん。どうかしたの？』

何か考え事でもしていたのかしら？』

哀は訪ねるように聞く。

『え？あつ…。』

ううん、何でもないよ？

哀ちゃん！！

』

精一杯の笑顔で歩美は言った。

…だってもし、哀ちゃんのお姉さんに何かあったとしたら、聞かない方が良くもんっ…!!

哀ちゃんが、

辛いもんね…。

『本当。こんなに私達の心を独り占めして…

責任取って欲しいわよね…吉田さん?』

『え…?』

そうだね。

ずるいよ、コナン君…。

『歩美達の心、独り占めにして…。

歩美もコナン君の心：独り占めにしたいな！』

『そうね…。』

まあ、江戸川君の心を独り占めに出来るのは、彼女しかないでしょうけどね。』

『良いなあー！コナン君の彼女さん！！』

羨ましいなあ。』

『吉田さん。江戸川君の彼女の事なんだけどね……』

何やらふたりは、コナンの事を話していた。

『えっ。そうなのっ!?!』

『そ。江戸川君、彼女の前だとね……。』

『ひそひそ……。』

一体何を話しているのかは、ご想像にお任せします。

『へっくしょん!』

(…風邪か?)

噂でくしゃみをしたのだから、コナンが気がつく事はなかった。

『じゃあなっ!みんな!』

元太が手を振って走って行った。

『また明日ねー!!
みんな!』

『元太君! 寄り道しちゃ駄目ですよー!!』

光彦は一言余計な事を言った。

『寄り道しねえーよ!』

『じゃあ僕もこっちですから、皆さんさようなら!』

『じゃあな！お前らっ！！』

『俺達も行こうぜっ？』

灰原！！』

『ええ…そうね。』

（博士、また私に隠れてなにかつまみ食いしたりしてないかしら？）

…心配ね。

『なあ？灰原。』

『何よ。江戸川君。』

『さっき、歩美ちゃんと何話してたんだ？』

『何って。』

秘密よ秘密。

女同士の話しょ？

：男の貴方に話せるわけじゃないじゃない。』

『何だよ、それ…』

（まあいっか。）

コナンはポケットから
携帯を取り出した。

（メール。

新一の携帯！

蘭からだ

蘭か。また『早く帰ってきなさいよ！』か？
（

あ…違うか。どれどれ、

『新一！ちゃんとご飯食べてる？』

食べなきゃダメよ！

事件で忙しいのは分かるけど、無理はしないでね？

…それと、たまには顔見せてよね…。

私…新一に遇いたい。

あつ、でも、新一が事件で忙しいのは分かってるし、

ちよつと言ってみただけだから、気にしないでね！』

『…蘭らしいなあ。』

ごめんな。蘭…………。

組織の奴らを取っ捕まえたら、

真っ先にお前の所に遇いに行くからな！

それまで、待っててくれ！！

…蘭！

『何笑ってんのよ？』

『別に…何でもねえよ。』

『そう。ならいいけど…。』

『まっ、どうせ彼女からの

メールでも見て、

ニヤニヤしてたんでしょけど。』

『なっ…!?!?』

何で分かったんだよ?』

どうやら凶星らしい

コナンの頬は少し赤い。

(俺、そんなにニヤニヤしてたのか?!!?)

コナンは顎を手で掴んで考えた。

『貴方の事だもの…。』

貴方を見てれば、分かるわよ。

それに、私も…

貴方の事が好きだから…!』

『えっ? 嘘…』

コナンは驚きを隠せずにいた。

『…嘘じゃないわ。本当よ……。』

『それとも貴方は、私が嘘をついていると思うのかしら?』

『…いや、そうは言わねえけど……。まさかマジ（本当）だったとはな…』

『…私は本気よ…工藤くん…?』

…少しでも、ほんの少しでも、わかってほしいの——

私の想いを——あなたに…。

少しでも…。

だけど、神様は私の願いを、

叶えてはくれない…。

『…悪い、灰原。』

俺はお前の事を頼れる相棒だと思ってる。』

ほら…、やっぱり。

ドクン…

『……だから、お前の事を異性として、————意識できねえんだ……。』

彼から見た私は、異性として意識してもらえていない――

ズキッ：

『俺の好きな女はただひとり、
俺は蘭以外の奴を…、好きにはなれねえし、

蘭以外のことを愛することもできない。』

ズキン…

ねえ…。

どうしてそんなに彼女の事が好きなの？

ズキン…

どうして……………、私じゃダメなの……………？

ズキン…

ズキン…

『……………あいつを守ってやれるのは俺だけなんだ!!』

ズキッ…

私だって、守ってほしいのに……。

『だから、お前の気持ちは嬉しいが…、

受け取る訳にはいかねんだよ…。

ごめんな……灰原。』

ズキン…

ズキン…

私の事、守るって言うてくれたじゃない……——

――あれは、嘘だったの？――

工藤君……。

ズキン…ズキン…

コナンがそう言い終わった時、

哀は俯いて泣いていた――

『……………』

馬鹿ね。私…。

こうなる事は分かった筈じゃない…。

工藤君は…

私に振り向いてはくれないって。

……。なのに、私…、急に工藤君に告白なんかして…。

ズキッ…

ズキッ…

.....馬鹿みたい.....

『おっ、おい…』

……やめて……。

『灰、
原？』

見
ない
でっ
！

そんな瞳で、……私を見ないでよっ！……！！

『お前…。』

泣いてるのか…？』

お願いっ!!

ドクン

これ以上…。

ドクン…

『灰原!!
おいっ!?!
』

工藤君と、一緒に居られない――――から。

ドクン…

ドクン…

工藤君……さようなら……。

だっ…

心の中で新一にそう言った後、哀は勢いよく走った。

早く部屋に行って泣きたいのだろう…。

誰も居ない部屋で、たった一人…。

それが新一を困らせないために哀が選んだ手段だった。

すべては、新一の前で泣いて新一を困らせない為に――――――

『っ！?』

『灰原！灰原あー！！』

いくら新一が叫んでも、

振り向いては…くれなかった。

哀の
…

それが、

優しさだから……。

失恋　　ゝ哀しい想いゝ（後書き）

『ここまで書くのに、ずいぶんと掛かっちゃった…。』

『本当よ!!!』

『貴方、どれだけ読んでくれてる人を、待たせてると思ってるの？』

『…すみません』（土下座）

『まあまあ。

仕方がねえよ、灰原。』

『コナン君!!!』（ばああ）

『作者の文才がねえーんだからよっ!!!』

(がーん)

『コナン君…酷いっ!?!?』

『だって、本当のことだろう？
なあ？ 灰原!』

『…』

(ちらっ)

『そうね…。』

確かに文才ないわね。』

『そ、そんなあ〜』

『哀ちゃんまでえ〜(泣)』

『哀ちゃんにコナン君…。
作者さんが可哀相よ!』

ちよっと言い過ぎじゃない?』

『蘭ちゃん!!』

『やっぱり、優しいなあ…蘭ちゃんは。』

『本当のことよ？』

蘭さん』

『そうだよっ！蘭姉ちゃん!!』

(…何で蘭ちゃんの前だと、子供の振りするの?)

『新一くん?』

(あっ馬鹿!!)

今、蘭いるんだぞ!!)

(名前言うなよっ!!)

(へっへーん!!)

絶対やだもーん。）

『二人とも、何を話してるのかな?』

『さあ?』

『どうでもいいけど、そろそろ仕切りましょ?』

『ほら、作者さんにコナン君!仕切るよー?』

コ・作『あ、うん!』

全員『ここまで読んで下さって有り難うございます!
次回も頑張りますので、是非観てください!』

『あれ?私の出番は?..?』

『ごめん。蘭ちゃん..
もうちょっと待って。』

それでは、有り難うございましたー☆

心の痛み（前書き）

更新です！

心の痛み

工藤君と別れた後…

私はひたすら、博士の家まで走った。

『ハア…』

『ハアハア…』

何も考えずに、ただひたすら走り続けた。

…逆に言えば、今は何も考えたくない。

自分に言い聞かせるだけで…。

もう、精一杯なの…。

（工藤君は、蘭さんが好き…。
私じゃなくて、蘭さん。）

…そう言い聞かせてるのに。

心では理解しているはずなのに…。

まだ、あなたの事が好きなの…。

工藤君…。

あなたが、まだ好き……。私はどうすれば…。良いの？

(ハア…ハア…)

博士の家を通り過ぎ、新一の家の前に足を止めた。(そういえば…
博士と工藤君の家は、

お隣りにさんだったわね。

)

哀は、新一に言われたことを思い出し、涙を流した。

「…だから、お前の事を異性として、意識できねえんだ。

…ごめんな。灰原…」。

「

ズキン…

涙はポロポロと流れて止まらない。

哀は、博士が居ないことを願って、ドアノブに手を掛け、家に入り地下室まで、泣き声を殺しながら走った。

『お帰り、哀君。』

そんな博士の言葉を聞き流し、哀は…走り去った。

『あつ、哀君？』

哀君！！？

』

何か、様子がおかしい。

不審に思い、声を掛けるが、走って行ってしまったため、原因を聞くことは出来なかった。

（哀君…。

一体、どうしたのかのう？

）

地下室に入った私は、鍵を掛け、小さくうずくまった。

（博士には悪いけど…。

迷惑掛けたくなかったの…。

博士、ごめんなさい…。

）

『やっぱり、何かあったんじゃない！』

博士は、受話器に手を伸ばし、新一に電話を掛けようとした。

プルルルル…

プルルルル…

（おかしいの…。

こんな肝心な時に、新一は何をしておるんじゃ？

）

また電話を掛けようと番号を押したとき、
玄関のドアが開き、コナンが入ってきた。

息が乱れている。相当走ったのだろう。

『ハア…。

ハア……。』

『新一君!! 電話したのに、どうして出なか……。』
『博士!! 灰原は?』

『あ、ああ……。』

哀君なら、帰って来るなり地下室に入って行ったよ』

『…そうか……。』

『?』

『新一。』

哀君の様子が変わるんじやが、何かあったのか?

』

『……………』

『新一君？』

『博士。』

『何じゃ？』

『聞いて驚くなよ…』

『あ、ああ…』

何を言うつもりなのか…。

(ま、まさか！

哀君の正体か奴らにばれて…。

それで哀君は、何も言わずに地下室に…………。

何でワシは…もっと早く気づいてやれなかったんじゃない？。

）

博士は勝手に納得すると、勝手に自分を攻めていた。

『おーい…。』

博士！…！灰原の正体は奴らにばれてないぜ？

』

『えっ…違うのか？新一！』

ワシはてつきり、正体かばれたのかと…。

』

『たくっ…勝手に勘違いするなよなー？』

『はは、スマン、すまん！』

あらためて、コナンは博士に話した。

『実は…俺、灰原に告白されたんだ…』

『い、告白！？』

心の痛み（後書き）

博士の反応はいかに？

次回、明らかになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0466ba/>

叶わない恋

2012年1月12日23時52分発行